



にし くら みつ てる
西倉 慎 顕

食の身近な相談所 代表

| 応募のきっかけは？

三重県の食品メーカーで研究や商品開発、地元産品を活かした地域活性化事業などを担当していましたが、食を通じて地域の中小企業や生産者の方々に支援したいという気持ちが常にありました。そんな中、仕事の都合で山口県に住んでいた妻から協力隊募集の話が持ち上がり、食を通じた地域活性化がミッションでしたし、身軽に動けるうちがチャンスだと思い、応募を決めました。

| どのような活動をされたのでしょうか？

食文化はその地域のアイデンティティですから、守っていく必要があります。任期中の3年間は、食文化の背景にある、人、物、歴史、組織(生産者、組合、商工会、法人など)の文化や価値観、雰囲気などを把握するため、丁寧に話を伺い、徹底的に調べました。商品開発は、ものを組み合わせるだ

けでできるものではなく、生産者・加工者・販売者が価値観や目標を共有した時に、ブレない商品が生まれ、商品に対する愛着が沸き、その結果、消費者に喜ばれる長期的な商品に育っていくと考えるからです。

| 大変だったことや、それをどう乗り越えられたのか教えてください

自分と同じ考えを持つ人がいないのがハードルでした。特に現場では、「製品を作ること」と「ブランディング」は違うということを、あらゆる手法で、何度も伝えていくようにしています。信頼を築くのに役立った



のが、前職での経験と知識です。地域の方からの質問や相談に答えたり、自分がハブとなって生産者と企業を繋げてウィンウィンになるようにフォローをするなどの活動を積み重ねました。

| 現在、そしてこれからについて

協力隊卒業後は、個人事業主として「食の身近な相談所」を立ち上げました。食を通じて、地域の潜在的なヒーローを顕在化するのが仕事です。事業者のお話を伺うところから出発し、技術面の支援はもちろん、継続的な販売に繋がるように、事業や商品が社会的な課題解決にどう貢献しているかを見出し、伝えていけるように支援します。任期中に関わった商品開発件数は約50件。口コミで、幅広い方面からご相談を受けるようになりました。地域に埋もれているヒーローに光が当たり、それを見て、次の世代が来てくれたら嬉しいですね。価値共創の時代ですから、僕と一緒にいたらチャンスが巡ってくるなあと考えてもらえたらいいなど。

| 協力隊を目指す人や後輩へのアドバイス

活動が専門的な分野なら実績が重要になります。私が心がけていたのは、中立の立場を貫き、常に顔が見えるように活動すること、地域住民としてのマナーやモラルを守ること、親孝行している気持ちで活動することなどです。

にし くら みつ てる
西倉 慎 顕 さん

▶ 協力隊として

| 着任地 | 山口市(南部)
| 活動期間 | 2015年7月～2018年6月
| 活動内容 | 食を通じた地域活性化、ブランド形成

▶ 現在の仕事

食の身近な相談所 代表



西倉さんのあゆみ

2015.春 ○ 妻から協力隊募集の話が持ち上がる
→ 応募

2015.7 ○ 協力隊着任

2015.冬 ○ 「ぱんぼきん」発売!



阿知須特産のかぼちゃ「くりまさる」を使用した地元企業のかりんとう「ぱんぼきん」

銭の菓子本舗と、「道の駅きららあじす」らしいものを作りたいと思って、星型になった。メディアにも取り上げられた。(製造者が道の駅にふさわしい商品を作ろうと取り組んだ意欲作)

2017.12 ○ 「益次郎ワイン」発売!

2018.1 ○ 鑄銭司のぶどう組合長がカルフォルニアにワイン研修に行っていたことから、地元ぶどうでワインを開発。

「秋穂饅頭」に関わる事業継承支援

高齢でお饅頭が作れなくなったおばあちゃんの後を、山口出身で東京の和菓子専門学校に通っていたリターン女性が事業承継。

2018.6 ○ 協力隊卒業

2018.9.14 ○ 日本経済新聞中国経済面「風は西から」に掲載

お世話になった前職の会社へのご報告にもなったかなと、安堵。

2018.12 ○ 「益次郎豆腐」開発
鑄銭司まちづくり協議会と。

2019.4 ○ 阿東の「ワサビのしょうゆ漬け」伝承支援

最後の作り手からJA女性部がレシピを習得。その他、阿東の米粉ソフトも支援。